

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 86 回 恥ずかしながら...都々逸を少々

所得税等の確定申告、ラストスパートである。毎年のこととはいえ、わがスタッフの誰も彼も、やたら忙しく動き回っている。こんな時こそ「忙中閑あり」、そんなゆとりを持ちたいものだ。その意を受けて、不謹慎ならずとも、今夜は「都々逸」である。

都々逸は「七・七・七・五」からなる短詩型の文芸で、俳句や川柳と違うのは、元来三味線のメロディにのせて歌う流行歌であった。ものの本によると寛政 12 年（1800 年）名古屋は宮の宿場の遊里の女中「お仲さん」が歌い始めたといわれている。元は神戸（こうど）節といわれていたようである。その後、囃（はやし）詞（ことば）から「都々逸節」と呼ばれるようになった。

ウンチクはこの程度、でも、都々逸のもっている^{いき}粋さ、^{つや}艶さが何としても好きで、さわりだけでも味わいたいと思っている、今日この頃である。

以下、小生好み（^{いろ}艶っばい）で、古典的^{いろ}都々逸を少々……。

- ・ 遠くはなれて逢^あいたいときは 月^{つき}が鏡^{かがみ}になればよい
- ・ 惚^ほれさせ上手^{じょうず}なあなたのくせに 諦^{あきら}めさせるの下手^{へた}な人
- ・ 嫌^{かた}なお方の親切^すよりも 好^{かた}いたお方の無理^{かた}が良い
- ・ お酒^の呑む人しんから可愛^{かわ}い 呑んでくだまきゃ なお可愛^{かわ}い
- ・ 信州^{しんそ}信濃^ばの新蕎麦^{そば}よりも わたしゃお前のそばがよい
- ・ 重^{かさ}くなるとも持つ手は二人 傘^ふに降^ふれ降^ふれ 夜^{よる}の雪^{ゆき}
- ・ けんかしたとき この子をご覧 仲^{なつ}の良いとき出来た子だ
- ・ 主^{ぬし}と私^{わたし}は玉子^{たまご}の仲よ わたしゃ白身^{しろみ}で きみを抱く
- ・ わしとお前は羽織^{はおり}の紐^{ひも}よ 固^{かた}く結^{むす}んで 胸^{むね}におく